

[ 優秀賞 ]  
伊藤 俊輔さん（にかほ市）レビュー

書評対象図書

森見 登美彦 著／角川書店装丁室 高柳 雅人 デザイン  
『夜は短し歩けよ乙女』(KADOKAWA／角川文庫)

人生は短い、だからこそオモチロイ夜を

もし、あなたの人生に「面白さ」が欠けているとしたら—。

物語の舞台は、幻想的な京都の夜。好奇心旺盛な「黒髪の乙女」が、「オモチロイ」を探して街を歩き回る。その姿を追いかけるのは、恋する大学の先輩。「なるべく彼女の目にとまる」「ナカメ作戦」を実行するが、ことごとく空回りしてしまう。ふたりの道すがらには、偽電気プラン、奇人変人たちが待ち受け、春の酒宴、夏の古本市、秋の学園祭、冬の奇怪な風邪騒動—四季を通じて次々と珍事件が巻き起こり、読み手は否応なく引き込まれていく。

この小説の魅力は、奇想天外な出来事の連続だけではない。古典の香り漂う文体と、ナンセンスギャグの軽快なリズムが織りなす独特の調べは、ただの恋愛譚を超えて、まるで現代の寓話のように響く。ページをめくるたびに笑い、首をかしげ、そしてふと胸が熱くなる—そんな体験が待っている。

そして最後のページを閉じたとき、胸に残るのは「人生は短い。ならば、もっと面白がって生きていいいのだ」という、ささやかながら強烈な余韻。この読後感こそ、本書が多くの賞に輝き、再読を誘う理由に違いない。

ただし注意してほしい。この物語には一度触れてしまうと繰り返し読みたくなる魔力がある。決して忙しい人は読むべからず。すでに人生を心から楽しんでいる人にも必要ない—。

なぜなら、この一冊は「退屈を感じている人」にこそ効く特効薬だからである。実際、私は気づけば何度もページをめくり直していた。読むたびに新しい発見があるのだから、困ったものである。

『夜は短し歩けよ乙女』は、山本周五郎賞を受賞し、本屋大賞でも第2位に選ばれた傑作。しかし、評価の本質は「賞」ではなく、読んだ人だけが知る心の変化にある。日常に潜む小さな冒険や偶然の出会いを「オモチロイ」と思えるかどうか。それを確かめられるのは、本を開いた人だけ。

さあ、あなたも今宵の京都を歩く乙女のあとを、こっそり追いかけてみてはいかがだろうか。

歩いたぶんだけ、あなたの世界は少しだけ面白くなる。